

くわしく調査するならば、先土器時代の遺跡が発見されるという期待が持てそうである。

先土器時代の人々は、土器の製作や使用することを知らず、主に黒曜石やサヌカイト等を材料として作った打製石器を使用していた。住居は岩かげや洞穴を利用して、枝のある立木に横木をしばりつけて、片側や両側から数本の木などを立てかけ、その上にかやその他でおおいをするといった極めて簡単な小屋がけ程度のものであったと推定され、川や泉の近くの見晴らしのよい丘陵の上に作られていた。

静岡県で発見された先土器時代の炉の跡から見ても、大きな炉を中心に家族の集まりくらいの小さな集団で生活を続けただろうと想像される。この炉は火の保存、調理、保温、照明と多様な役目を果たしたであろう。彼らの社会は家族の集まりくらいの小集団によって構成され、野生の動物や食用植物をとって食べる自然採集経済であったことから、その食料を求めて、季節的にあるいは短期間に転々と居住地をかえてジブシーの生活をしたものと考えられる。

四、縄文時代

概 説

今からおおよそ二万二千年以上前のころは、まだ阿蘇や雲仙、多良等の火山活動が激しく続けられていたが、やがてそれも次第に治まり、わが佐賀にもどこからともなく土器を作る人々がやってきた。筑紫

山麓一帯に竪穴住居を作つて、狩猟や自然植物採取の生活を続けるようになり、先土器時代の人々と長い間に解け合つたことであろう。こうして佐賀人の先祖も出現したのである。

彼等は土器の外に石器や骨角器も使つたが、この時代はもう新石器時代に入るのである。彼等はわが国最初の土器と言われる縄文式土器（縄文土器）と呼ばれるものを製作使用した。したがつてこの時代を「縄文式文化時代」とか「縄文文化時代」とか「縄文時代」などと呼ぶのである。

土器は自然の柔かい粘土をこねて器形を作り、様々な文様を入れ、それに火熱を加えて焼いたのである。今まで貯蔵のための容器、物を煮炊きしたり、食物を入れる容器がなく、火で焼くか、生のままで食べることに知らなかつた人々が、この土器の製作使用によって、どれだけ生活が便利になつたか測り知れない。今まで食べにくかつた食物も煮れば容易に食べられるし、食物の消化、吸収も促進されるし、殺菌もできるので、人間の体質も大きく改善されるきっかけとなつたのである。つまり、土器の製作使用は食生活の革命をもたらしたものと云えるのである。

縄文時代は考古学界では、土器の形や、文様等の特徴を基にして型式を作り、同じ型式の土器に対してその代表的な遺跡の地名や文様の名をとつて土器の型式名とし、又遺跡の地層によって年代順に配列している。この型式により縄文時代を早期、前期、中期、後期、晩期の五期に区分するのが普通であるが早期の前に草創期を設定して六期に区分する学説もある。

縄文時代の主な事から（井上光貞編「日本の歴史」年表より）

早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期
貝塚の出現、数戸単位の竪穴住居を作る。砲弾型の土器を作り、縄文をつける。	広場を中心とした竪穴住居の集落が出現する。平底の土器が一般化する。	集落の規模が大きくなる。高地にも大集落ができる。大型で雄大な土器が多量に作られる。	馬蹄型の貝塚を中心とした集落ができる。土器の種類が多くなり、地方差が顕著になる。土偶が盛んに作られる。	低地にも集落ができる。北九州では稲の栽培と二種の織物の製作が始まった。

1 縄文式土器

自然の柔らかい粘土で先ず器形を作り、その表面に縄や紐を押しつけたたり（押圧縄文又は捺糸圧痕）、押しつけながら転がして文様を作ったり（回転縄文）、撚糸（細縄）を別の撚糸や短い丸い棒軸にコイル状に巻いたものを押しつけたたり（絡糸体縄文）、押しつけながら転がしたり（撚糸文）して、撚糸や細縄の撚り目の跡を文様としたのである。しかし、この時代には縄文だけでなく、ヘラや貝殻などで文様をつけた土器も相当あるが、これらを一括して縄文土器と呼んでいる。縄文土器は素焼で、次の弥生式土器に比べて焼き方が幼稚で質もろく、色合いが一般的に黒褐色ないし茶褐色をしている。もち論器形や文様などは時代的に地方的にあるいはその用途によってそれぞれの特色があり多種多様である。

(1) 大和町と縄文式土器

時代	種類	出土地	摘 要
早期	押型文土器	礫石北東、全ウバノツクラ 全南方、野口クルマ、 水上塚原及同墓地北 大願寺北原北方 大久保新堤北西	約八千年前のものといわれ、関東地方西部から九州地方までの広い地域に分布している。鉛筆ぐらゐの細くて丸い棒に連続した山形、格子目（こうしめ）、楕円（だえん）などを彫込み、これを生かした土器の表面に回転させて、山形文、格子目文、楕円文などの浮き出した文様をつけたものである。大和町ではこの式のものの遺跡が、一番多く、水上塚原遺跡ではこの土器の様子がそろって出土しているが、他の遺跡では楕円文だけ出土している。これらの土器の形は口縁部は直立又はやや外にそらっているようであるが、底の方は発見されていないのがとがっているのか平底かはわからない。

縄 文 時 代		前 期		中 期		後 期		晩 期	
	曾畑式土器	礫石北東 大願寺北原北方	今山野瀬南方	阿高式土器	船塚北東	鐘ヶ崎式土器	礫石南方 船塚北東	御領式土器	礫石ウバノツクラ 同南方
	山ノ寺式土器								
	※(1)曾畑式とか阿高式というのは、例えば曾畑式というのは、例えは曾畑式というの、熊本県宇土市曾畑貝塚から型式の違ったものが出土したので、その地方の名や貝塚等の名をとりつけたものである。 (2)沈線文というのは細い棒状の工具で切りこんだ線をえがき、あるいはそのまま押しつけていた文様である。								

大和町の山麓地帯では縄文の草創期に当る隆線文土器や爪型文土器はまだ発見されていない。又縄文だけのものも見られない。九州地方では一般に縄文を施した土器は極めて少なく、多くは他の文様と併用されているのが一つの特徴である。

礫石北東から出土した曾畑式土器の表面には煤がたくさんついていたが、これは煮沸用に使われ、

直接たき火にあてたことを示すものである。曾畑式土器の底部は丸底や砲弾型のがった底のものが多く、煮炊きに利用する場合は、土の中に底面を突立てて埋め、まわりから火をたいたのであろうか。土器は煮沸用以外には食料や水の貯蔵や運搬用として用いられたことはいうまでもない。

2 大和町と縄文時代の石器

出土品	出 土 地	摘 要
石 鏃	礫石北東、同南方、同ウバノツクラ。野口クルマ。水上塚原、同墓地北。船塚北東。今山野瀬南方、同坊山	石鏃は弓矢として狩猟や戦闘用に利用されたものである。石鏃は縄文草創期ないし早期のころの隆線文土器や爪型文土器と共に出土することはなく、次の押型文、燃糸文を有する土器と共に出土することになる。大和町出土の石鏃はそのほとんどが打製のもので、サヌカイトや黒曜石で作られ、なかの二つは有茎石鏃はなく、三角形か底辺が内部に切り込んだ無茎のものである。サヌカイト製のものが多く、これらは多々市という比較的近い所に求められる。黒曜石は伊万里市の腰岳など遠距離にあったことと関係があるかも知れないと考えられる。
石 斧	礫石北東、同南方、ウバノツクラ。(いずれも打製のもの) 水上塚原(打製) 船塚北東(打製、磨製)	一名「皮はぎ」「石小刀」ともいわれ、樹木や動物の皮はぎに使ったり、肉を切ったりするナイフとして用いられたものである。水上塚原から出土したものはいずれもつまみのついた縦形、横形のものがある。木工具や土掘りの用具として用いられたもので、打製と磨製とがある。大和町出土のもの打製石斧はサヌカイト製が多いが、磨製石斧は磨く関係からかたい質の石材を使えないのでやわらかい質の石材が使用され、船塚北東や礫石ウバノツクラ出土のものには蛇紋(じやもん)岩製である。
石 錘	水上塚原 船塚北東	漁撈上の一種の「おもり」として使用されたもので、船塚北東の出土のものは楕円形であり、その長径の方に「きり」に溝をつけている。
磨石	礫石南方	物に穴をあける「きり」に溝をつけている。サヌカイト製で一方につまみをつけている。木の实などをすりつぶすために使用したもので「すりこぎ」のような役目をする。

3 生活と社会

大和町においては、先土器時代に続いて縄文時代の早期から晩期にかけての遺跡が発見されている

が、遺物は極めて少なく、又発掘調査された遺跡もないので、当時の人々の生活や社会を知ることが困難だが、佐賀県などの調査結果や他の文献等によって概略を述べることにする。

(1) 集 落

この時代の集落は時代が進むにつれて次第に大きくなっていった。中期の今山野瀬南方の阿高式土器の出土が、早期の押型文土器や前期の曾畑式土器よりも飛躍的に増加していること、更に礫石南方の晩期の山ノ寺式土器になるといっそう著しい出土数を見ることは、人々が次第に漂流生活から定着してきただけを物語ると共に、集落の規模が大きくなってきたことを示すものと言えよう。

集落を構成する人々は血縁関係によって結ばれていたと考えられる。住居の規模もほとんど差異がなく、又埋葬法も同じことからして、村人の間にはまだ身分や貧富の差はなかったものと考えられ、経験豊かな長老などが集団の指導者であったと思われる。ただ発展のテンポはのろく、地域によって生活資料が違えば、それにしたがって社会組織にも、その色合いの違いがあったことは疑えない。

(2) 食 料

この時代も先土器時代に引き続いて、自然採集経済の段階で、人々は狩猟や漁撈によって、鳥獣や魚貝をとり、又野生の植物をとって食料とした。佐賀県ではこの時代の貝塚は非常に少ないが、唐津市西唐津築港海底遺跡からは曾畑式土器などと共に、シカ、イノシシ、サル、イヌ、クジラなどの獣骨や鳥骨、タイ、スズキ、フカ、マグロ等の魚骨、クルミ、シイが発見されている。又西有田町の坂ノ下遺跡

は縄文時代の中期から後期初頭ごろの遺跡と考えられているが、その貯蔵穴からアラカシ、シイ、チャンチンモドキ、ツブラなどの木の実が出土している。

※貝塚は貝の食べがらが厚い層をなしているもので、その中には鳥獣魚骨類、土器その他の器具の破片もある。の、一般的にはゴミ捨場の一種と考えられている。しかし、中には完全な土器もあり、又時には人骨が発見されることもあるので、単なるゴミ捨場ではなく、食料に供したものの霊を天上に送り返して、それが再び生まれ変わってきて、人々の生活を豊かにするよう祈ったりした宗教的意味を持った場所であつたらうとも考えられている。

※坂ノ下遺跡ではアラカシ、シイなどの木の実を入れた貯蔵穴が九個発見された。この中の一粒が寄贈的にも発芽し、目下佐賀県立博物館で管理育成されているが、放射性炭素年代測定器で計った結果およそ三千年前のアラカシの実とわかった。

このようなことから考えて、今から約三千年ほど前の縄文時代の大和町の人々も、町内各地から発見される石鏃などによって、狩猟をしていたことは確実であり、その他野生の植物を採取したり、川や池から魚貝を捕って食生活をしたと考えられる。

ただ、北九州の一部では、縄文晩期ごろから「コメ作り」が始められたようで、唐津市枝去木女山遺跡の山ノ寺式土器片や同市宇木汲田遺跡の夜白式土器の底部に、粃跡のついたものが発見され、又宇木汲田遺跡からは「焼けゴメ」も出土している。しかし、これらの遺跡の位置や地形等から考えて、水稻ではなく、陸稲がある限られた地域にのみ栽培されていたのではないかといわれている。

(3) 住居

この時代の人々の多くは、竪穴住居と呼ばれるものに住んでいた。これは地面を平たく円形や方形、長方形等の形に、約四〇〜五〇センチほど掘り下げた土間を作り、その床面のまわりに、石斧等で切った木を柱として掘立て、草で屋根をふき、内部に石で囲んだ炉を設けた。広さは普通一五〜二〇平方メートルで、五〜八人から七〜八人ぐらいの家族が起居できるくらいである。又地面を掘らず、地面にじかに柱を掘立て、内部に炉を設けた平地住居と呼ばれるものもあり、前時代からあつた自然の洞穴や岩陰を利用した住居もち論あつた。

東松浦郡相知町千束の竪穴住居跡は、押型文土器や曾畑式土器が出土していることから、縄文時代早期末か前期初頭の時期のもので、径二メートル、深さ七十センチの円形で、周壁にそつて四十二本の柱穴があり、中央には石で囲んだ炉が設けられていた。又西有田町山本の伊古石の住居跡は、縄文早期のものとして推定される。直径二・五メートルぐらいの隅丸方形(方形だが角が丸い)の竪穴住居で、これも住居跡のほぼ中央に直径五十センチ余の不整円形の炉の跡が見られ、又九か所の柱穴が発見されている。

大和町では縄文時代の住居跡はまだ発見されていないが、町内にある遺跡やその他黒曜石、サヌカイトなどが多数散布している所は、当時の人々の生活の場所に違いなく、住居跡発見の可能性はあるといえよう。当時の住居は山麓地帯の標高二五〜五〇メートルぐらいの丘陵地や段丘に設けられたのが多いが、これは彼らの生業が狩猟を主とする自然採集経済で、動物や食用植物に恵まれていたからであろう。

(4) 衣服

衣服はその材料の性質上早く腐敗し易いので具体的にはわかりにくい。ただ、西唐津海底遺跡その他から、骨製の針が発見されることや、撚った糸が土器の文様をつける道具として早くから用いられていたことなどから、樹皮や獣魚皮を縫い合わせた衣類や編物のような衣服があったらうと推測されている。ただ、この時代も晩期になれば、土器に布目をおさえつけたあとが発見されたことから、織物があったことは確かである。

装身具は豊富に用いたようで、貝を細工した腕輪(貝輪)、動物の歯、骨、あるいは硬玉、軟玉等の美しい石を円や平たく加工して紐を通し、首飾り、耳飾り、髪飾り等にした。県内でも数種の装身具が発見されている。

(5) 縄文のころの人

この時代の洞穴や貝塚等から発見された人骨を調査研究している学者達は縄文人をおよそ次のように想定している。

このころの人々は洪積世時代の人々より身長がやや高くなり、一五七—一六〇センチぐらいで、頭は比較的大きくいわば「頭でっかち」であった。顔の幅が広く、長さは短かく、ほほ骨が横に張り出していた。又当時の人の顔を特に特長づけるのは、眉間から眉のふちにかけて強く突き出ており、反対に鼻のつけねはひどく引つ込んでいる。鼻は高く鼻すじが通り、歯は今の我々と違って、上下の歯が爪切りの刃のように合っているので、ひどく受け口に見えたのではないかといわれている。

縄文時代の終わりごろつまり三千年くらい前は、男女共に十六、七才になると、前歯の何本かを抜く習慣があり、抜歯することによって成人になったしるしにしたという。抜歯といっても、石のようなすりを使い、長時間をかけてすりへらしていくもので、途中未完成のまま死ぬ人もあった。平均寿命は三十才ぐらいで比較的短命であったと考えられる。又関東地方特有の土偶(粘土で作って焼き上げた人像)の顔面に残る点列などから推測すれば「入れ墨」が行われていたのではないかといわれている。入れ墨は三世紀半ばごろになると中国の魏志倭人伝に記されているとおりだが、この時代にはすでに一部の地方で始められていたかも知れない。

以上縄文時代の生活の概略を述べたが、彼らの生活の中には時に野火、山火事、落雷等の恐ろしい自然の災禍もあった。それは集落遺跡発掘の中に火災によって滅びた住居跡の多いことがわかったからである。しかし幾年か経ってその焼跡に他の人々がやって来た時はすでに新しい豊かな沃野が待っていたことであろう。これが中期以降になると原始焼畑耕作へと発展したと思われる。そして更に時代が進むにつれ、狩猟や魚撈の道具も発達して、人々は次第に山麓や丘陵から海浜、沼地、河岸等の低地へおりていつて住むようになってはななかりうか。

五、弥生時代